

# ビデオ会議時の話者の映像の有無による 日本語スピーチの自己評価, 注目点, 伝達感の比較

小林 輝美<sup>1, 2</sup>

<sup>1</sup> 教育テスト研究センター <sup>2</sup> 杏林大学外国語学部

対面でコミュニケーションを取る際、話者から話者自身の姿は見えない。一方、ビデオ会議システム使用時には、ビデオをオンにすることで話者も自分自身の姿を見ることができる。対面とビデオ会議で異なることはあるのか、本研究ではビデオ会議を用いてペアで日本語でスピーチをした際、視聴者のビデオのみ表示する群と話者と視聴者の両方の映像を表示する群に分け、スピーチの自己評価、画面中の注目点、伝達感を比較、検証した。視聴者の映像のみを表示する群（実験群）と話者と視聴者の両方の映像を表示する群（統制群）を比較したところ、視聴者の映像のみを表示する群（実験群）の方がスピーチの自己評価が高かった項目が2つあった。また、話者と視聴者の両方の映像を表示する群（統制群）の方が視聴者は話者のビデオに注目していた。そして、伝達感に有意差はなかった。

キーワード：スピーチ, 映像, 振り返り, 伝達感, ビデオ会議

## 1. はじめに

対面のコミュニケーションとビデオ会議システムを使用したコミュニケーションの大きな違いは、話者としての自分が見えるか否かである。対面時は自分自身の姿を見ることができない。一方、ビデオ会議システムを使用時に自分のビデオをオンにすることで、自分自身の姿を見ることができる。なお、対面でもビデオ会議システム使用時でも、コミュニケーションを取る相手の姿を見ることができる。ビデオ会議システム使用時、対面時に合わせ、相手の姿を表示させた上で自分自身の姿も表示させると、視覚による情報は倍増する。ビデオ会議時に話者の映像のみを表示する群と話者と視聴者の両方の映像を表示する群に分け、英語スピーチの自己評価を比較したところ、話者の映像のみを表示する群が19項目中6つの項目で自己評価が高くなった（小林 2021）ことから、画面に表示する情報が少ない方が、スピーチの内容に注目できたのではないだろうか。

また、リーブス・ナス（2001）によると、映像視聴時にネガティブなものに注目し、記憶に残りやすいとされる。自己の映像視聴時に嫌悪や羞恥の感情が生じることが多く、ビデオ会議時に自己の映像を視聴することでネガティブな感情が生じ、ビデオ会議の内容よりも自己の映像に注目するのではないかと考えられる。つまり、自己の映像がない方がコミュニケーションの内容に注目できるのではないだろうか。

Joinson (2001)によると、対面よりも Computer-Mediated Communication（コンピューターを介したコミュニケーション。以下、CMC。）の方が自己開示が高い、つまり、顔を見せない状態の方が自己開示が高くなり、私的自己意識が高く、公的自己意識が低いと CMC 利用時に自発的に自己開示するとされる。ビデオ会議使用時に話者が自分のビデオをオフにすることで自己開示が高くなり、発言しやすくなるのではないだろうか。

これらのことから、ビデオ会議時に話者が自分のビデオをオフにした方がビデオ会議の内容により注目し、スピーチ時の自己評価が高くなると仮定し、検証した。

## 2. 方法

日本の大学に所属する学生 67 名（男性 33 名，女性 34 名）を実験群（男性 17 名，女性 18 名）と統制群（男性 16 名，女性 16 名）に分け，ビデオ会議システムのひとつである Zoom を使用して実験を行った。ブレイクアウトセッションの機能を用いてペアを作り，交互に日本語でスピーチをしてもらった。実験群は話者のビデオをオフ，視聴者の映像のみを表示し，統制群は話者と視聴者の両方の映像を表示した。視聴者にはメモを取らないよう指示した。スピーチ終了後，話者はスピーチについて自己評価を行った。

自己評価項目は 19 項目あり，5 段階で回答してもらった。「プレゼンテーションについて，よく準備をした。／暗記できた。／内容が適切だった。／自信を持って発表できた。／快適だった。（緊張などせず，気持ちよくできたかどうか）／アイコンタクトを取ることができた。／ジェスチャーが適切だった。／表情が適切だった。／身だしなみが適切だった。／姿勢が良かった。／声の大きさが適切だった。／声がはっきりしていた。／流暢だった。／発音が適切だった。（カタカナ英語ではなかったかどうか）／イントネーションが適切だった。（疑問文ではない所で上がらない，など）／トーンが適切だった。（低すぎない声だったかどうか）／間が適切だった。／伝えたいことが伝わった。／全体的に見て，適切にコミュニケーションを取ることができた。」さらに，ビデオ会議時に一つの画面に話者の映像・アイコン，視聴者の映像，スピーチの原稿を表示させ，どこにどの程度注目していたか，5 段階で回答してもらった。

話者がスピーチをしている間，および視聴者がスピーチを聞いている間に画面のどこを注目していたか，3 つの項目について 5 段階で回答してもらった。「自分のビデオを見ていた。／スピーチを聞いている人のビデオを見ていた。／原稿を見ていた。（スピーチをしている間のみ）」

伝達感の度合いを調べるために，2 つの項目について 5 段階で回答してもらった。「話し手の気持ちがよく伝わってきたと思いますか？ 話し手が伝えなかった内容が十分に理解できましたか？」

## 3. 結果

ビデオ会議時に話者のビデオをオフにし，視聴者の映像のみを表示する実験群と話者と視聴者の両方の映像を表示する統制群のスピーチの自己評価を比較した。

### 3.1 スピーチの自己評価の比較

実験群と統制群のスピーチの自己評価を t 検定を用いて比較したところ，話者と視聴者の両方の映像を表示する群（統制群）が「アイコンタクトを取ることができた，ジェスチャーが適切だった。」という 2 つの項目で 5%水準で有意に高かった。

### 3.2 注目点の比較

実験群と統制群の注目点を t 検定を用いて比較したところ，話者がスピーチをしている間の注目点には有意差のある項目はなかった。視聴者がスピーチを聞いている間の注目点では，話者と視聴者の両方の映像を表示する群（統制群）が「スピーチをしている人のビデオを見ていた。」という項目で 5%水準で有意に高かった。

### 3.3 伝達感の比較

実験群と統制群の伝達感を t 検定を用いて比較したところ，有意差のある項目はなかつ

た。

#### 4. 考察

##### 4.1 スピーチの自己評価の比較

アイコンタクトを取るには相手の目を見なくてはならないため、相手の顔を見ることができない場合は、アイコンタクトを取ることができたと感じにくいと思われる。ジェスチャーについても画面で自分のジェスチャーを見ることで判断できるのだと思われる。対面よりもビデオ会議使用時の方がジェスチャーが大きくなる、ジェスチャーを使用する回数が増えるようで、他の外見に関する項目よりも顕著なのかもしれないが、検証する必要がある。

##### 4.2 注目点の比較

話者はスピーチをしている間、視聴者や原稿を見るため、常に1点に注目するわけではなく、注目点が分散するのではないかと考えられる。一方、視聴者はスピーチを聞いている間、本実験中はメモを取らないことになっており、話者にしか注目する必要がなく、また、スピーチであることから、視聴者である自分よりも話者に注目したのではないだろうか。

##### 4.3 伝達感の比較

視聴者にとって、話者のビデオの有無で伝達感は変わらないというのは、電話をしている時と同じような状況で、相手の顔が見えなくても話の内容を聞き取ったり、理解しようとしたりする態度は変わらないのではないかと考えられる。電話ではお互いの顔を見ることはできず、本実験では少なくとも視聴者の姿は表示されていたため、完全に同じ状況とは言えない。

#### 5. まとめ

ビデオ会議を用いてペアで日本語でスピーチをした際、話者のビデオの有無をもとにスピーチの自己評価、画面中の注目点、伝達感を比較、検証した。視聴者の映像のみを表示する群（実験群）と話者と視聴者の両方の映像を表示する群（統制群）を比較したところ、視聴者の映像のみを表示する群（実験群）の方がスピーチの自己評価が高かった項目が2つあった。また、話者と視聴者の両方の映像を表示する群（統制群）の方が視聴者は話者のビデオに注目していた。そして、伝達感に有意差はなかった。

今後の課題として、対面とビデオ会議時を比較し、頷きやジェスチャーなどコミュニケーションの取り方の違い、および電話のようにお互いの姿が見えないコミュニケーションについて検証したい。

#### 参考文献

- Joinson, A. N. (2001) Self-disclosure in computer-mediated communication: The role of self-awareness and visual anonymity. *European Journal of Social Psychology*, 31, 177-192
- 小林輝美 (2021) ビデオ会議時の視聴者の映像の有無による英語スピーチの自己評価と生じる感情の比較, 教育テスト研究センター年報, 6: 73-75
- バイロン・リーブス, クリフォード・ナス著, 細馬宏通訳. (2001)人はなぜコンピューターを人間として扱うか—「メディアの等式」の心理学. 翔泳社.

